業 界 短 信

（２１年9月１日～9月３０日）

飯塚鉄鋼、切板母材を一括管理（産業新聞、９／４）

㈱飯塚鉄鋼（兵庫県姫路市、岩城正治社長）は、本社工場内に建設していた建材条鋼センターが完成、在庫の移動も完了し、このほど運用を開始した。同センターの完成により、これまでの在庫センターにスペースの余裕ができたことから、営業倉庫の母材在庫約３０００トンをセンターに集約した。同社は姫路地区の大手鋼材販売･加工業者で、主力事業は建設機械、重機、発電関連、造船、橋梁向けの切板加工を行っている。

日鉄神鋼シャーリング、切板月間 2600 ㌧に減（産業新聞、９／７）

㈱日鉄神鋼シャーリング（大阪市此花区、木村秀明社長）は今下期の切板について、月間平均 2600 トンを予定している。今年 4―8 月（月間平均）対比では約 600 ㌧減。内訳は橋梁向けが 1900 トン、鉄骨等が 700 トン。下期は新政権誕生で補正予算の見直しが懸念され、橋梁向けの落ち込みが予想されることや、建築鉄骨もさえず、同向けの切板も低水準を見込む。収益については 6 月から黒字に転じており、通期での黒字確保を目指す。本社工場にプラズマ３基、レーザ 2 基、NC ガス 4 基、ドリルマシン 1 基、多目的シャーリング 1 基などを持つ。

中部鋼鈑、新圧延ラインが稼働（産業新聞、９／７）

中部鋼鈑㈱（名古屋市中川区、成田健一郎社長）は、約 90 億円を投じてきた圧延工場の基盤整備工事を完了し、新ラインの稼働を開始した。生産性向上による納期対応力の強化や、製品サイズ拡大により、顧客ニーズへの対応力向上を目指すもので、省エネ、省力、コストダウン効果も引き出してゆく。圧延工場の基盤整備は、同社が掲げる規格品など高付加価値品の拡充、オリジナル製品の比率アップなど差別化戦略の確実化を目的に実施。具体的には加熱炉をリジェネバーナー炉に全面更新し、省エネ化とともに生産性向上を図る。また、圧延ミルモーターの能力強化により、連続スラブ鋳造機の更新で可能になった 300 ㍉厚スラブの活用、スラブ単重 8 トンから 10 トンへの引き上げや、製品板厚 20-30 ミリの拡大を目指している。単重の拡大に合わせホットレベラーの改造、輸送テーブルの全面更新も行い、圧延、搬送速度を向上、冷却装置の増強で冷却時間の短縮化も図っている。

現代製鉄・唐津、厚板ミル 12 月試験生産（産業新聞、９／１６）

現代製鉄は唐津の一貫製鉄所で年産 150 万トンの厚板ミルのホットラインを 12 月 2 日に始める。１２月からの試験生産では、輸入スラブを使い、１月 17 日からは自前のスラブを使う。来年 4 月の商業生産移行に向けてテスト生産に入る予定だ。厚板ミルに

は加熱炉、圧延設備、切断ラインを 9 月中に設置し、10 月は加熱炉を乾燥するなどの作業を進め、11 月から切断ラインの試運転、加熱炉の火入れに入る。コークス炉は 11 月 16 日に開始し、焼結工場は 12 月 1 日に稼働する。製鋼工場、連続鋳造機は 9 月に稼働テストし、11 月には連動テストに入る。来年 1 月からは実稼働を開始する。

鉄骨ファブの操業率、10～12 月さらに低下も（鉄鋼新聞、９／１８）

10～12 月の鉄骨ファブの操業率は、7～9 月期に比べて、一段と低下する可能性が高まってきた。現在見積りや計画が進む新規案件は総じて「本格的な着工は早くて年明け」の傾向が強く、10～12 月期が端境期になるとの観測が拡大している。大手は年内の受注を確保するものの、一時的に加工案件が手薄になる時期を抱える業者が散見される。中堅や中小は 5 割を切る低水準の稼働が相次ぎ、市中では秋口以降の受注にメドが立たないとの声も聞かれる。

玉造㈱、安全活動バッジを作製（産業新聞、９／２４）

玉造㈱（札幌市豊平区、西村孝治社長）はこのほど、安全活動の象徴として、七宝焼きのセーフティーバッジ「ふくろう」を作製し全従業員に配布した。マンネリ化を避けるため毎月第 2、4 週に限定して襟につけ、互いに確認し合い安全意識を高めている。2005～2007 年の「安全まんじゅう」に次ぐ安全対策の一環。題材としたシマフクロウは、北海道に生息する天然記念物。森の哲学者と言われ、アイヌは「コタン・クル・カムイ」（村を守る神）として崇める。首を 180 度回転させる習性を職場に生かし安全を確保。２4 時間心眼を光らせ身を守り、どんな場合でも動じない心を醸成し、安定した職場づくりを目指す。一方、恒例となった安全衛生強化週間に社員や子供たちから寄せられた今年の安全標語は 66 点。ポスターは 16 点。今回の標語の優秀賞には「気のゆるみ　着衣のゆるみ　事故のもと」が選ばれた。

シーヤリング工場、切板月 1500-1600 ﾄﾝに（産業新聞、９／２４）

㈱シーヤリング工場（大阪府堺市、永吉明彦社長）は、本社工場の 10-12 月の切板数量について、１５００－１６００トンを予定している。7-9 月期に比べて３００-４００トン増。内訳は、橋梁など建材向けが６００トン前後、産機向けが９００－１０００トン。今上期は不況の影響を受け、本社工場の切板生産は低調であった。4-6 月（月平均）は約１０００トン、７-９月は１２００－１３００トン、１０-１２月は建材、産機向けで受注確保のめどが立っており、同１５００－１６００トンを予定している。

菰下鎔断、２年後に全設備更新（産業新聞、９／２５）

㈱菰下鎔断（大阪府貝塚市、菰下千代美社長）は、２年後に本社のレーザ専用工場のレーザ全設備（４基）を更新する。設備が老朽化し、来年には設備リースの契約更新時期となることから、これに対応する。最新鋭機に更新することで、切板の生産性向上を図るとともに、小物・複雑形状の切板加工をさらに強化する。

東国製鋼、１０月、新厚板ミル生産開始（産業新聞、９／２８）

東国製鋼は、１０月２０日、唐津に新設した厚板ミルを稼働させる。試験生産ながら厚板生産を開始し、早期の商業生産移行を目指す。２０１０年には新ミルの生産量を100 万トンに引き上げ、11 年には 150 万トンのフル生産を計画している。同社は浦項工場で年産１００万トンの第１厚板ミル、１９０万トンの第２厚板ミルを操業しており、新ミルが加わると年産能力は 400 万トンに拡大する。

日鉄神鋼シャーリング、多目的シャーシステム稼働（鉄鋼新聞、９/３０）

㈱日鉄神鋼シャーリング（大阪市此花区、木村秀明社長）は、重量１０ｷﾛｸﾞﾗﾑ台の小型品の生産性向上を狙いとした多目的シャーリングシステムを導入。１０月からの本稼働に向けて、９月３０日に竣工式を開催する。現在は昼間８時間操業だが、１０月から昼夜連続の１６時間操業にシフトアップする。投資額は約１億５千万円。こうしたシャーリングシステム導入は国内初とみられる。新システムは入側に印字装置を設置し、自動で１枚１枚にマーキングして、人為的なミスを防止。又小型品の形状を CCD カメラで撮影して記録することで、追跡調査も容易となった。当面は月産約１万枚が目標。